【論文】

質的調査と時間の哲学
双葉町のフィールドワークから(2)

Qualitative Research and Philosophy of Time:
Fieldwork in Futaba Town(2)

高山　真†

1　問題の所在

福島県の双葉町に通いはじめて2年ほどになる。東日本大震災・原子力災害伝承館(伝承館)の開館をきっかけに双葉に通うようになった。伝承館では日々、語り部による体験講話がつづけられている。髙倉伊助さんとの出会いも、伝承館の語り部を聞くなかでの出会いであった。伊助さんは双葉町に生まれ育ち、17歳の頃から東京の赤坂で植木の修行を始めた。10年ほど東京で働いたのち双葉に戻った。

生まれ育った家のことは二人の弟にまかせて双葉には帰らないつもりだったが、弟さんたちが二人とも家を出たことで伊助さんは双葉に戻ることにしたという。その後、東日本大震災を体験し、17歳から修行をさせてもらった会社から声がかかり、ふたたび東京での生活をはじめるようになった。伊助さんが55歳のときである。震災の後は、眠れない夜も多かった。津波の被害から地区の人たちを守ることができなかったという後悔の念もあった。赤坂で多くの方にお世話になることも有り難いと感じる一方で、申し訳ないと感じる部分もあった。

二度目の東京の生活をはじめてから7年ほど経過した頃に、双葉町浜野地区の行政区長を引き受けてくれないかという依頼を受けた。そんなことはしたくない、また顔を見たら殴りかかってしまうかもしれないという思いも生じた。どうして、あのとき言うことを聞いて避難してくれなかったんだという思いは、語り部として震災の経験を語るいまも消えることはない。

現在の双葉町に暮らす人は70名程度である。町の面積の8割を帰宅困難区域が占めている。残りの2割のうち、1割は中間貯蔵施設の敷地として利用されている。伊助さんによると、自由に移動できるのは町の面積の1割程度である。帰りたくても戻れない方々も多くいる。こうした町の状況は新聞やテレビの報道からも部分的に知ることはできるが、実際の双葉町にはどのような時間が存在しているのか。それは、この土地に暮らすものにしか感じることはできないだろう。

ただし、土地に暮らしたことがない者であってもフィールドワークに取り組むことで、双葉町に存在する時間を体感することはできるかもしれない。新聞の報道では時間が止まった町という言葉を目にするこ

†立教大学社会学部助教

ともある。しかし、この言葉は、はたして双葉町の現実を反映しているのだろうか。時間の哲学という観点から「水平に流れ去る時間」と「垂直に積み重なる時間」という野家啓一により提唱された二つの時間概念をふまえて「止まった時間」の存在を指摘することはできる。こうした指摘は生きている者と亡くなった者の相互行為を検討するという興味深い視点を与える。その際には、双葉町で生活してきた人々の経験にそくして、相手の語りを聞く〈わたし〉の視点から考える点が大切になる。

具体的には、その土地をくりかえし訪れ、そこに暮らす人たち、あるいはかつて暮らした人たちの語りに耳を傾けながら、どのような体験を語るときに語り手の主観的意味世界に止まった時間が現れるのか。そのような時間は、出来事を直接的に体験していない者とどのように共有できるのか。相手の語りを聞くという行為に焦点をさだめて考えていきたい。

こうした調査研究を構想するとき、些細なエピソードであるが、双葉駅前のコミュニティセンターに常駐するスタッフの方との会話を思い出される。双葉を訪れるようになってまもない頃、双葉駅前のコミュニティセンターをよく訪れた。何度か訪れるうちに、スタッフの方と立ち話をするようになった。その頃に、「もしかすると何も変わっていなように見えるかもしれませんが、着実に町は変化していると思います。2週間に1度訪れるとその変化がわかると思いますよ」と話されていたことが印象に残っている。

たしかに、伝承館の開館後、双葉に通うようになってから2年のあいだに、双葉駅前には町役場の建物が完成し、役場に出入りする人々の様子を目にするようになり、双葉駅の西側に建設中であった公営住宅も徐々に完成しつつある。人が暮らすようになったことは大きな変化といえるだろう。現在、商店はないが、大手スーパーの移動販売車を見かけるようになり、伝承館に隣接する産業交流センターにはコンビニエンスストアも出店している。公営住宅に暮らす双葉町生まれのSさんやCさんとも伊助さんを介して面識ができ、コミュニティセンターでお話をすることがある。

双葉に通いはじめた当初は当然のことながら知り合いはおらず、双葉駅から伝承館まで自転車で通いつづけた。フィールドワークという意識は抱きつつも、双葉に通う目的はかならずしも明確ではなく、語り部の語りを聞ききながら、何のために双葉に通い、語り部を聞いているのだろうと自問自答する時期がつづいていた。この頃から、これまでに取り組んできた長崎被爆者のインタビュー調査の経験は双葉のフィールドワークにどのように関わるかという点が焦点になるだろうと考えるようになった。

長崎被爆者を対象とした質的研究に取り組んできた過去を振り返ると、そもそも、長崎における調査研究は調査に取り組んだ自分自身にとってどのような意味を持つのかと考えることもしばしばあった。双葉町には東京電力福島第一原子力発電所が立地する。いうまでもなく放射能被害という点で双葉町と長崎のあいだには共通点がある。とはいえ、長崎原爆被災による被爆と福島第一原発事故による被曝の経験を同一のものとして捉えることには違和感をおぼえる。

東日本大震災が生じた頃に、長崎の調査でお世話になったある被爆者が「放射能被害に不安を感じている福島の人たちに何かできることはないだろうかと考えている」と話されていたことが印象に残っている。その当時は、こうした語りを聞きながら、はたして長崎と福島のあいだに被災者同士の関係は成り立つのだろうかと疑問に感じていた。

こうした疑問は、いまも基本的には変わらない。原爆被災を生き延びた被爆者の経験と、原発事故に

より故郷に戻ることのできなくなった人々の経験には明確な違いがあるはずだ。この現実をふまえるところからしか、長崎と福島という異なる二つの出来事の関係を考えることはできないだろう。おそらく、この問題に答えをみいだすためには流れ去る時間の経過を待つしかない側面もあるだろう。

双葉に通いはじめてから2年が経過したいま、〈わたし〉にとっての「双葉町」は伊助さんが暮らした町になりつつある。〈わたし〉にとっての「双葉町」とは何を意味しているのか。いいかえると、伊助さんというひとりの人の主観的な世界をとおして、この町の過去、現在、未来について考えてみたいということである。双葉の訪問は基本的に日帰りであり、滞在する時間はかならずしも長くはない。しかし、双葉から自宅に戻り、大学の講義で双葉について話し、ゼミでは学生と話し合い、語り部を録音させていただいた音声を何度も聞くなかで、伊助さんというひとりの人をとおして双葉町という場所について考えてみたいという問題関心が形成されてきたといえよう。

伊助さんは、どのような人生を歩んできたのか。震災当時、伊助さんは55歳であったが、それから12年が経過している。12年という時間の流れのなかで社会は変化し、双葉町の状況も変化している。社会が変化するなかで、伊助さんというひとりの人においては、2011年3月11日の体験の意味はどのように変化してきたのだろうか。語り部として体験を語るようになったのは伝承館が開館した2020年9月以降のことである。個人的に話を聞かせていただくなかで、依頼をうけて語り部をするようになったと聞いている。

双葉に通うなかで、このように考えるときもある。伊助さんにとって、3月11日という日を境として、それまでに生きてきた時間で経験したことの意味も大きく変化しているのではないだろうか。震災を生き延びたという体験をとおして過去をふりかえるとき、震災以前の双葉での暮らしにたいする思いや、過去を想起する際に生じる感情も異なるのではないだろうか。人生に積み重なる時間のなかで震災という出来事はどのように経験されているのか。こうした経験はどのように言語によって表現されているのか。さらにいえば、言語によって語りとして表現された語りえない経験を、実際には震災を体験していない〈わたし〉はどのように聞くことができるのだろうか。こうした視点から、双葉町という場所について考えていきたい。

オーストラリアの先住民アボリジニの歴史研究に取り組んだ保苅実が指摘するように、フィールドワークをとおして多くの出会いはあるのだが、自然と形成された信頼に基づく楽しい関係もあれば、残念ながら考え方や価値観などからすれ違ってしまう関係もある。保苅は、こうしたフィールドワークをとおして実現する出会いと日常の人間関係は基本的に同じものではないかと指摘している（保苅2018: 36-8）。もしそうであるなら、フィールドワークをとおして、顔を見て話すことを楽しいと感じる人との出会いの経験こそ大切にしていく必要があるのではないだろうか。そして、こうした出会いの楽しさをフィールドワークの記述に素直に反映していくことが必要であるように思われる。

もちろん、双葉町の現実に目を向けると、中間貯蔵施設、処理水、そして福島第一原子力発電所の廃炉など考えるべき問題は多く、伊助さんもまた、こうした問題にたいしてはときに厳しく意見を述べる。こうした問題にたいする伊助さんの意見を聞くたびに、この土地に暮らした経験のある人にしか語ることのできないことだと思う。

調査というかたちで定期的に双葉を訪れ、語り部を聞き、資料や文献を読むことも大切だが、このような「調査」に取り組んでも、その土地に暮らした人々と同じ思いをもつことはできないだろう。中間貯蔵施設、処理水、廃炉という目に見える問題にたいする考えだけではなく、津波の被害により亡くなった方々にたいする生き残った者の思いについても考える必要がある。双葉町全体をみると津波の被害を受けた地域は限られているが、伊助さんが暮らしていた浜野地区では津波の被害により亡くなった方もいる。3月11日に黙祷するなどして、亡くなった方々を悼むことは誰にでもできるが、亡くなった方々の「顔」を思い浮かべることのできる人にしかわからない感情はあるはずだ。

フィールドワークというかたちで双葉を訪れる者には、伊助さんが助けることのできなかったという思いを抱きつづけている亡くなった方々の顔を思い浮かべることはできない。この違いは大きい。顔を思い浮かべることのできない死者がいるという現実を知ると、〈わたし〉は踏み入れることのできない領域があるという感覚をおぼえる。こうした死者の存在にたいするおそれの感覚は調査研究にかぎらず、双葉を訪れる人々において共有する必要のある感覚であるようにも思われる。これは調査倫理の問題ではなく、死者を含む他者にたいする倫理の問題といえるだろう。双葉を訪れるなかで考えてみたい中心的なテーマはこのあたりにある。

亡くなった人にたいして生き残った者が抱く罪責感という問題は、広島と長崎の被爆者調査においても検討されてきた。私自身も、長崎の調査をとおして生存者の罪意識の問題を考えつづけてきた。こうした罪責感は、ときに出来事を体験した者と体験していない者を分断してしまう。体験した人のなかでも、どこで被爆したのか、何歳のときに被爆したのか、家族を亡くしているかなどの違いによって考え方に違いが生じている。しかし、それでも、ある部分については一緒に考えることのできる問題もあるのではないだろうか。長崎の調査をとおして、こうした問題について考えてきた。

伊助さんの語り部を17回ほど聞かせていただくなかで、伊助さんには津波の被害から助けることのできなかった地区の人たちにたいする強い思いがあることが伝わってくる。伊助さんの語りに耳を傾けようとしているのだが、伊助さんの語りには罪責感という言葉には収まらないさまざまな感情が含まれているのではないかと想像することしかできない。それでは、この土地に暮らしたこともなく、津波を見たわけでもなく、原発事故により長年にわたり先祖から受け継いできた土地に暮らすことのできなくなるという喪失体験もない〈わたし〉は、伊助さんとどのような経験を部分的にであれ共有し、一緒に考えていくことができるのだろうか。

この問いにたいする答えは、双葉に通い、フィールドワークをつづけるなかから自ずと明らかになるようにも思われる。ただし、あえて方向性を示すとすれば、一緒に考えることのできる問題は、本稿の主題である「時間」にかかわる事柄である。伊助さんは、しばしばつぎのように語っている。

> 10年経って、この町が変わっていれば、その先も変わっていくだろう。10年経って、何も変わっていなければ、その先も変わらないだろう。目の黒いうちは、この町の変化をみていきたいと思っている。[1)]

双葉のローカルな言葉に馴染みのない〈わたし〉には、伊助さんの方言を交えた特有の語りを再現する

ことができないのが残念だが、伊助さんの気持ちはどこかでわかるように思う場合もある。中間貯蔵施設のあり方については明確な意見を述べることは〈わたし〉にはできないが、双葉町の変化を見ていきたいという思いを共有することはできるのではないだろうか。さらにいえば、こうした思いを共有できる感覚は、いったいどこから訪れるのだろうか。人が生きていく上で、極限的という言葉によってしか表現できない現実に直面したときに、人はその後の人生をどのように生き延びることができるのか。伊助さんの語り部の演題は「生きのびるために」である。

取り返しのつかない出来事を体験した後、人はその生を全うするために、どのような「時間」を形作ることができるのだろうか。時間という問題を語りとの関係で考えるというテーマ設定はあまりにも抽象的であるのだが、上記の問題関心に基づいて、こうした抽象的なテーマを伊助さんというひとりの人において体験された現実にそくして考えていきたい。

2　語りの風景

2022年11月12日、双葉を訪れた。双葉町のフィールドワークを始めてから、伊助さんが語り部をする日にあわせて双葉を訪れることが多い。この日は、双葉駅から伝承館まで歩いて向かった。双葉駅から伝承館まで徒歩で行くと30分ほどである。コミュニティセンターのスタッフの方から聞いたように、やはり町の様子は少しづつ変化している。以前は空き地であった場所に新しいアパートが建てられ、入居している人たちがいる様子が伺える。伊助さんに聞くところによると、双葉駅前に新しく建てられた双葉町役場に勤める人が入居しているケースが多いようだ。

双葉駅の西側の公営住宅も建設が進められているが、伊助さんによると、公営住宅に暮らす人は県外から移住してきた人の割合が多く、震災以前に双葉町に暮らしていた人たちも居住しているという状況である。町役場に勤める人たちには、公営住宅への入居にたいしてどこかで遠慮する気持ちがあるのではないかと伊助さんは話してくれた。伝承館は海沿いの浜野地区にあるが、この地区は津波の被害があった場所である。伊助さんによると、浜野地区は電気、ガス、水道が整備されていないため、また地盤沈下の影響もあり住居を建てることはできない。

後述するように、伊助さんはかつてこの地区に暮らし、避難先での生活をつづける人たちにも定期的に連絡をとり、状況を説明し、地区の人たちの協力を得て、中野八幡神社の再建に取り組んでいる。震災から7年目に、浜野地区行政区長への就任を依頼された。震災が生じた当日には地区に暮らす人たちに避難を呼びかけたが、呼びかけに応じてくれない年長の方々もいた。震災後は眠れない日も多かったと振り返る。葛藤の末に家族とも相談し、行政区町の就任を引き受けた。伊助さんは地区の人たちと細かに連絡をとり、必要な書類を揃え、福島県と交渉を重ねた末に神社再建の計画を進めることができるようになった。現在は中野八幡神社を再建する仕事に取り組んでいる。

伝承館もまた、この地区に建てられた。伊助さんが先祖から受け継いできた家は、伝承館からわずか100メートルしか離れていない場所にあった。

生まれも育ちもですね、この建物(伝承館)、この場所からですね、100メーター後ろ、北側の方にですね、100メーターいったところが自宅でありました。それで、もともと私は職業はですね、植木屋です。50年、植木屋やってます。ほんで、17で、10年くらい住み込みで赤坂の方で、植木屋の修行してました。そんで、震災前まで、まあ、ここで植木屋として仕事をしておりました。ええ、2011年3月11、その日はですね、まあ、私いる、この場所から、3.5キロ西側の方ですね。小学校のほうの管理作業してました。[2)]

伊助さんの語り部は、自分自身が伝承館から「わずか100メーター」北の場所に生まれ育ったことから始まる。現在、伝承館には30名ほどの語り部が所属しており、休館日を除いて毎日、午前と午後に2回の語り部講話が実施されている。午前の部と午後の部は、それぞれ異なる語り手による語り部が実施される。筆者は、2022年の春から定期的に伝承館を訪れて、全体の半数程度の語り部を聞いている。通い始めた当初は、なるべく多くの語り部を聞くために午前と午後の両方を聞き、場合によっては個人的にお話を聞かせていただいた。

こうした調査の進め方は長崎の語り部の初期の調査とよく似た方法をとっている。そのため、長崎の調査経験と双葉町の調査経験を比較することができる。長崎では、2005年の調査に着手した時点で約60名の方が語り部に取り組んでおり、全体の半数程度の語り部を聞き、語り部の後に個人的な聞き取りに協力していただいた。ふたつの調査を振り返ると異なる点がある。長崎の調査では、多くの語り部が個人的な聞き取りに特にためらいなどもなく応じてくれた。

聞き取りといっても、1時間から2時間程度の時間をとっていただき「なぜ、体験を語るようになったのですか」「体験を語る際にはどのようなことを意識されていますか」という簡潔な質問に答えていただくかたちで進め、相手の方に負担のかからない雰囲気で自由にお話をしていただくことを心がけた。

双葉町の伝承館の語り部を聞くなかでは、語り部の後に個人的にお話を聞かせていただく機会はかならずしも多くない。これは双葉に通うなかで自分自身でも気になる点であった。長崎の調査では自然と個人的に話を聞くことができたにもかかわらず、双葉では同じように語り部に取り組む人たちから個人的に話を聞くことができないのか。この疑問にたいして、現段階では明瞭な答えを示すことはできないのだが、ひとつの仮説を提示しておきたい。

長崎被爆者の語り部は、多くの場合、核廃絶と平和教育という文脈のなかに個人的な体験を位置づけるようにして体験が語られる場合が多い。こうした整理は、ひとりひとりの被爆者の個別的で私秘的な体験の彩りを削ぎ落としてしまうかもしれない。しかし、長崎被爆者の語りの傾向としては、このように指摘できるだろう。

その一方で、双葉町の伝承館の語り部は、長崎の語り部にみられるような核廃絶や平和教育のような語りの文脈が形成されていないように思われる。語り部として実際に体験を語られている方々がどのように感じていらっしゃるかについては想像するしかないため、ここに記すことはあくまでも聞き手として伝承館の語り部を聞くなかで調査者に生じる感情経験にもとづく推測である点を断っておかなくてはならない。

原爆被災の経験であれ、震災の経験であれ、その人の人生において何にもまして大きな意味をもつ出

来事を体験したときに、人はその体験を語る意味を探究するのではないだろうか。体験を語る意味の探究は、体験を忠実に再現する言葉の探究とは異なるように思われる。体験を語る意味の探究は、体験を忠実に再現する言葉の探究と深い関係にあるはずだが、両者は異なる位相にあるのではないだろうか。筆者が長崎被爆者の調査に着手したのは、原爆被災から60年の時間が経過している時期であった。この時期には、被爆の体験を語る意味については社会科学者と被爆者の間でも十分に議論され検討されていた[3)]。

双葉町の伝承館を訪問するなかで、語り部として体験を語ることの意味の探究という営みが置き去りにされている印象は拭えない。この問題は、からずしも語り部という形式で語られる個人の語りにかぎるものではないのかもしれない。長崎では、なぜ体験を語るのかという質問を語り部に取り組む方々に尋ねることができたのは、すでにそうした思考が体験を語る人々のなかに浸透しているという感触を得ることができていたためかもしれない。

このように考えていくと、双葉町の伝承館の語り部を聞くという経験は、ひとりひとりの人が体験した過去が、まさに、いま、ここで立ち上がる瞬間に立ち会う経験なのかもしれないという思いが強くなってくる。双葉町を訪れて、伝承館の語り部を聞くたびに刺激を受けてきたが、それは、長崎の被爆者調査では体験することのなかった感覚である。このように語りを聞く者に生じる感覚は、伊助さんの語り部をはじめて聞いたときに、とりわけ強く生じたように思われる。

3　一服だど、休むべ

> 職人、いわゆる、一服、休憩、職人の場合は、休憩だあ、なんて言わないです、みんな、このへんだったら、一服だど、とか、休むべ、くらいで。普通ですと、3時なんですけど、休憩時間つうのは、その日はですね、まあ5人で、それよりちょっと早く、2時30分、地べたに腰おろして、その小学校の前のスペースの場所にですね。腰おろしながらですね。世間話をしてました。

伊助さんの語りに惹かれるのはなぜだろうか。その理由のひとつは、方言のもつ豊かさかもしれない。伊助さんと話すときに、しばしば話題になることのひとつに、筆者が伊助さんの語り部を録音させていただき、録音した音声を文字に起こした資料（トランスクリプト）をお渡しした際のエピソードである。トランスクリプトを作成するなかで、録音を何度も聞き直しても聞き取れない箇所があった。また、文字に起こしても、その言葉が何を意味するのか不明瞭な点があった。こうした箇所は四角の記号を付すなどして資料を作成した。この資料をお渡ししたため、「語り部を文字にしてくれたんだけど、方言がわからないから丸とか三角とかいっぱいついて」と笑い話になることもある。

聞き取れない理由は、方言、言葉のなまりである。正直にいえば、お話をさせていただくようになってから間もない頃は、伊助さんが話している言葉をほとんど聞き取れないこともあった。知り合って1年以上経った今でも、話している際に伊助さんの言葉を聞き取れないことはある。伊助さんの会話はテンポが早く、その時々に考えていることを目の前にいる相手にすぐに言葉にして伝える傾向がある。こうした

伊助さんの語りの傾向は、筆者にたいしてだけではなく、伝承館を訪れて語り部を聞く多くの人たちや、伝承館に隣接する双葉町産業交流センターや双葉駅前のコミュニティセンターで会う初対面と思われる人たちにたいしても同様である。

些細な点にこだわっているように思われるかもしれないが、こうした体験は、人の話を聞く際に私たちがどのように相手を理解しているかという問題にかかわる示唆的な事柄を含んでいるのかもしれない。知り合った当初を振り返ってみると、話している言葉を聞き取れないからといって、伊助さんの話していることがわからないかといえば、そうではなかった。伊助さんが伝えようとしていることはわかるように思う。仮に言葉を正確に聞き取ることができたとしても、それ以上のことは、そのときの〈わたし〉にはわからないのかもしれない。

震災が生じたとき、伊助さんは浜野地区の家から3.5キロ、西に離れた場所にある双葉南小学校の校庭の管理作業をしていた。2023年6月7日の福島民友新聞によると、双葉南小学校は「原子力災害の過酷さを伝えるアーカイブ施設」として保存することが町議会全員協議会の方針として示された。双葉南小学校は、2022年8月に避難指示が解除された特定復興再生拠点区域内にある。避難指示の解除から1年以内に建物の解体を申請すると、国の費用で解体できるため、保存か解体かの判断を迫られていた。伊沢史朗町長は双葉南小について「広島の原爆ドームのように、大災害の記憶を後世に残さないといけない。費用対効果や経費だけで考えてはいけない。多くの皆さんに原子力災害の過酷さを見てもらう施設にしたい」と話したと報じられている[4)]。

双葉町の町長が町の未来について語るなかに「広島の原爆ドーム」のようにという言葉が登場する点についてはどのように考えればよいのだろうか。広島の原爆ドームを見る者の多くは、原爆被災により亡くなった人々や、爆心地の近くで被災した人々が直面した現実に思いを馳せ、その状況を想像しようとするだろう。そして、生き延びた人々が直面する過酷な状況を想像することは実際に出来事を体験していない者には到底できないという諦念を伴いながら、二度と原爆が使用されないように（never again）と願うかもしれない。

原子力災害の過酷さを伝えるアーカイブ施設を見学する者には、どのような心理が生じるのだろうか。震災から12年が経過しているが、12年という時間は、双葉町で震災を体験した人々にとって「長い時間」であったのだろうか。それとも、昨日の出来事のように思い出される出来事として記憶されているのだろうか。伊助さんは双葉南小学校で地震の揺れを体験したときのことを、つぎのように語っている。

> そしてですね、いや、こうだって言ってるうちですね。2時46分。いや、もう、こうやって地べたにみんなで腰おろしてたんですけど。はいつくばんないと、手を張ってないと、その場所に体がおさまっていないような、かなり強い揺れでした。いや、こら、やばいな、ということはですね。私は、やはり、ここ生まれ、海育ちですから。いや、これだけ揺れたんじゃ、津波っつな、頭に浮かびました。それでですね。来てる人にもですね。自分はじめ、いちばん先にふっ飛んで家に帰りたかったです。やはり、おふくろ一人ですから、じゃあ、今日は、もう片付けすぐやって、もう自宅に戻ってくれ。で、私もですね、そう言いながらですね、すぐ家に戻ってきました。

このように語り部を録音した音声を文字に起こした資料を読みながら、〈わたし〉は、はいつくばらないと、手を張っていないと、その場所に体がおさまっていないような強い揺れが生じる以前の双葉には、どのような「時」が存在したのだろうかと想像することがある。震災が生じる以前の双葉町には、当然、人々の生活があり、営みがあり、仕事があり、伊助さんの語りに登場する、一服だど、休むべという言葉で指し示されるひとときがあったはずだ。

職人の場合は、休憩だあ、なんて言わないです、みんな、このへんだったら、一服だど、とか、休むべ、くらいで、という語りから、一緒に仕事をする仲間とのやりとりの息づかいを感じ、植木職人として双葉に暮らしてきた者にしかわからない誇りを感じる。

4　被災者になるという現実

語り部として語るようになった経緯を伊助さんから聞いたことがある。詳細には語られなかったが、伝承館の建つ浜野地区の状況を知る人ということで語り部として語ってくれないかと依頼を受けたそうだ。語り部として語るなかでは、震災が生じた後に、17歳から修行をしていた赤坂の植木の会社から連絡が届き、また働かないかと声をかけてもらった経緯に触れられる。そのころは夜も眠れない日がつづいたという。

> やはり、目をつぶって、寝よう、寝ようと思っても、寝れないんですよ。やっぱ、考えてるっていうか、なんで、あつく、俺を、もうちょっと、その、できなかったつか、もうちょっと、強く、避難所つれてこれなかったのかな、とか、なんで、あつくいかなかったんだべ。わかんないんですよ。だから、いまも悔いるっていうか、いや、自分も、ああ、いま考えれば、そんな津波こねえわなって思ってた部分もあるのかなっても、思うんです。

こうしたときに伊助さんが思い出すのは、長い間、一緒に暮らしてきた地域の人たちの顔である。伊助さんは「もうちょっと、強く、避難所連れてこれなかったのかな、なんで、いかなかったんだべ」というくだりになるときに、声がつまり、涙をこぼすときもある。伊助さんの語り部は１ヶ月のあいだに2日間おこなわれることが多い。1日に2回の語り部講話をおこなうため、毎月、4回の語り部に取り組んでいる。

伊助さんにとって、語り部として体験を語ることにはどのような意味があるのだろうか。語りを聞きながら、いつも感じることのひとつは亡くなった人たちにたいする思いの強さである。被災者とは誰を指すのか。これは震災という問題を考える際に重要な問いである。津波で亡くなった人が被災者なのか。双葉郡のなかで震災を体験した人々が被災者なのか。福島県内で震災を体験した人が被災者なのか。被災3県とよばれる岩手県、宮城県、福島県で震災を体験した人々が被災者だとすると、首都圏で震災を体験した人は被災者ではないということになる。

すこし脇道にそれるかもしれないが、伝承館の語り部を聞いていると震災当時に東京に在住していた

語り手もいることに気づく。この方は、震災後にボランティアとして福島を訪れるなかで伝承館の職員になり語り部として語るようになったと語っている。こうした生き方の語りはきわめて稀なものであるようにも思われるが、この方の語りを聞いたときに、被災者になるという言葉が頭をよぎった。

それというのも、長崎で被爆者の語りを聞くなかで「被爆者になる」という語りについて考えさせられた経緯があるためである。長崎の小菅町で被爆を体験した廣瀬方人さんは、自分自身の人生を振り返り、被爆者になる人生だったと思いますと語っている。廣瀬さんは、数多くの被爆体験の聞き書きの実践をとおして「私」は被爆者になっていったのではないかと自分自身について語っていた。

廣瀬さんはすでに他界しているが、被爆者になる人生であったと自分自身を語る長崎被爆者の存在を振り返るときに、こうした考えは福島の被災者においても現れてくるのだろうかという疑問が生じる。すでに被爆者である者が「被爆者になる」と自己を物語る前提には、被爆体験を語るという行為と被爆体験を聞くという行為は思想的な営みであるという認識がある。被爆体験を語る行為が思想的な営みであるという認識が現れたのは1970年前後のことである。

長崎被爆者のインタビュー調査にもとづく研究をふまえて双葉町のフィールドワークに取り組んでいる〈わたし〉は双葉町という場所を長崎原爆被災の語りとの関係で考える傾向がある。長崎という視点から福島を考えようとすると、ある問題に直面する。双葉町、大熊町、富岡的など双葉郡で実際に震災を体験された方々は、地震、津波、原発事故、避難生活という困難な現実に直面するだけではなく、ある日を境として自分自身が「被災者」と呼ばれることに複雑な感情を抱かざるを得ない現実にも直面したのではないだろうか。こうした現実について、どのように考えればよいかという問題である。

たしかに、津波の恐怖、原発事故にたいする不安、避難生活の状況を想像し、追体験することは「被災者」について考える際に必要なことであるだろう。しかし、それだけではなく、ある日を境として「被災者になる」という現実を、いいかえれば、被災者にならざるをえなかったという現実を、実際にその立場に生きている人たちはどのように受け止め、今はどのように考えているのかという問題を〈わたし〉は考える必要があるのではないだろうか。

5　被災者にしか語れないこと

被災者になるという現実を引き受けざるをえない。たしかに、こうした現実はあるのかもしれない。しかし、こうした問題を考える際には、ある問題を考慮しなくてはならない。長崎の被爆者調査においても同様の問題について考えた。なぜ、ある人は「被爆者になる」という語りで示される人生を生きるようになり、ある人はそのような人生を歩まないのかという問題である。もちろん、被爆者になるという語りは廣瀬さんという個人が自分自身の人生を説明するために用いた言葉であり、この言葉がどの程度の一般性を有するかについては検討の余地が残されているだろう。

ただし、被爆者になるという語りは、災厄的な出来事を生き延びた人たちが、その後の人生を生きるなかで、自分自身が被った体験をどのように捉えて、その後の人生においてどのように語るのか、あるいはどのように行動するのかという問題を考える際には有効な指標となるように思われる。なぜ、他で

もない「わたし」がこのような目に遭わなくてはならないのか。長崎で被爆を体験した人々にも、双葉町で震災を体験された方々にも、こうした思いは生じたのではないだろうか。もちろん、戦争という状況で被爆を体験することと、自然災害に起因するかたちで原発事故の被害を受けることでは、その出来事が生じた文脈に違いがある。

実際のところ、長崎でインタビューにご協力いただいた方々のなかでも、東日本大震災が生じた直後に、福島の被災者のために何かできることはないかと考えていると語る廣瀬さんのような被爆者もいれば、戦争の状況下で生じた原爆被災による被爆体験と、震災により生じた原発事故の被曝を同じように扱ってほしくないと感じていると語る方もいた。こうした語りを聞きながら、〈わたし〉はいずれの考え方も間違いとはいえない一方で、正解も見当たらないという曖昧なことしかいえない状況にいた。

双葉町で2年ほどのフィールドワークをつづけるなかで、たしかに長崎の被爆者の経験から双葉町の現実を考えることは重要な視点であるように思うが、双葉町に固有の現実もあることを考えなくてはならないと考えるようになった。その理由は、伊助さんという人との出会いによるところが大きい。

福島と長崎という問題を考える際に、社会学の先行研究ではどのような議論がされているのだろうか。実際に被災した土地を継続的に訪れ、人々の声に耳を傾けるフィールドワークにもとづく研究を参考として、ここで確認しておきたい。震災直後から大熊町のフィールドワークをつづける吉原直樹は、戦後日本社会における原子力の運用制度について、原爆（核兵器）と原発（原子力の平和利用）を明確に区分した上で、前者から後者への道筋が肯定的に語られてきたと指摘している。第一の要点は、広島、長崎への原爆投下と福島の原発事故を明確に区別して原子力を把握する認識が広く社会的に共有されていたという点にある。第二に、吉原は、こうした認識にもとづき、戦争の状況での原爆投下から原子力の平和利用へという文脈が形成されたと指摘する。双葉町と長崎という問題を考える際に検討すべき重要な論点になるため、吉原による主張の主要な点を引用しておきたい。

> 原子力の平和利用は、もともとは冷戦の進展を見据えてアメリカの覇権を確立するために画策されたものであり、核兵器の廃絶というよりはその独占をもくろむ意図のもとにアメリカ側から打ち出されたものであった。原発の誘致／立地に際しては、この点がひた隠しにされ、もっぱら原子力の平和利用が地域振興とセットとなって強調された。（吉原 2021: 32）

吉原は、このように戦後日本社会における原子力をめぐる歴史を見立て、つぎのように指摘する。

> このようにして、本来、原発の誘致／立地にあたって、戦争から平和という路線を貫くなら、被爆／被曝の経験を継承すべきであったが、まったく継承されなかった。（吉原 2021: 33）

長崎で出会った廣瀬さんは、東日本大震災の直後に「長崎の被爆者が長年にわたり被爆体験の継承を訴えてきたにもかかわらず、こうした形でふたたび被曝を体験することになったことが本当に残念に思っています」と語っていた。こうした廣瀬さんの声と、吉原の主張は基本的に同じ方向を向いているといえ

るだろう。たしかに、原発を建設する場所でこそ、被爆体験を継承すべきであったという主張は正しいかもしれない。長崎被爆者である廣瀬さんの語りを聞いてきた〈わたし〉が双葉町を訪れるなかでも、どうして双葉町では被爆体験が継承されなかったのだろうという思いが生じることはある。

ただし、こうした議論の重要性は十分に認めつつも、そこには検討すべき余地もあるように思えてならない。それは、こうした議論の正しさを揺るがすものではないかもしれないが、聞き取らなくてはならない声があるという問題である。その問題の所在は、実際に双葉に暮らした人々の声に耳を傾けることから見えてくるように思われる。伊助さんの話を聞くなかで、伊助さんのお父さんが原発についてどう考えていたかということを伺う機会があった。伊助さんのお父さんは、原発の誘致には反対であった。その理由は、原発の危険性についての説明が曖昧であり不十分であったからだという。伊助さん自身は、事故が起きた後に原発について賛成、反対という議論をしても仕方がないと語ることが多い。

伊助さんとの会話のなかで印象に残るのは「今だったら毎日旗ふってでも反対します」という言葉である。この言葉は、伊助さんという一人の被災者にしか語ることのできない言葉である。この言葉の意味を性急に説明しようとするのではなく、まずはこの言葉の重みを受け止め、そこから考えなくてはならない。伊助さんの言葉から〈わたし〉は何をどのように考えはじめるのだろうか。

6　取り返しのつかなさ

双葉町のフィールドワークを始めてからしばらくの間、双葉町を訪れ、人々の語りに耳を傾けるなかで〈わたし〉は何を考えようとしているだろうかと考えていた。そのなかで出会ったのは鈴木智之による福島県南相馬市の小高で上演された演劇をめぐる論考である。震災という出来事の後を生きる者にとって切実な問題は何か。地震、津波、原発事故という複合災害を直接的には体験していない者は、深刻な状況を生きのびた人たちが直面する状況をどのような形で一緒に考えることができるのだろうか。震災という具体的な現実を考えるためには問いが必要である。

もちろん、問いの形はさまざまであろう。これまでに取り組んできた調査や研究によっても問いは変わりうるだろう。ひとつの問題を考える際に唯一の正しい問いは存在しないはずだ。しかし、ひとりの人が生きていくなか、その人にしか考えることのできない問題はあるように思う。その人にしか考えることのできない問題へのアプローチは、その人が生きていくこととどこかで結びついているように思われる。どのような問題をいかに考えるのか。それが、問いである。問いは、探求する者の内部から発せられているだろう。ただし、ある人の内部から発せられる声に形を与えるのは他者からの呼びかけであるように思えてならない。いいかえると、自分自身の内にある声が誰かに届くように形を与えるのは、自分以外の誰かの言葉や、誰かという存在なのかもしれない。

双葉町という場所を訪れるなかでの伊助さんとの出会いは、〈わたし〉にある問題を考えることを強く促しているように思われる。その問題がどのような問題であるかを考えるために、先行研究は手を差し伸べてくれる。鈴木は、出来事の後で日常を生きるという問題を考えるにあたり、つぎのように指摘している。

> すべての出来事は、起こってしまった後には決してそれ以前に戻ることができないという意味で、取り返しのつかないものである。したがって、私たちは常に「出来事の後」を生きている。これは、不可逆的な時間を生きている限り逃れられない事態であるが、幸いにも、そのことが大きな問題として体験されるのは稀である―「日常性」とは、その「取り返しのつかなさ」が問題化しない形で推移することを指すのだと言えるだろう。だが、時として、出来事の後になお生活を営まなければならないということが、苦しみとして立ち現れる。この時、「その後の生」はいかにして可能となるのか。そこにどのような「時」を形作ることができるのか。（鈴木 2020: 33）

誤解をおそれずにいえば、双葉町を訪れるたびに、ある種の安堵をおぼえる。もちろん、伊助さんの顔をみて、伊助さんの話を聞く時間は緊張感をともなう時間である。ひとつひとつの言葉を敏感に聞こうとしなければ、伊助さんの話していることの意味をとらえることはできない。日常生活から緊張感をもって双葉町の現実について考えている様子が伝わってくるために、その言葉に耳を傾けようとする〈わたし〉がいることに気づく。

伊助さんにかぎらず、双葉町で出会う人たちと話をさせていただくと、それぞれの人がうかがい知れない人生の多様な背景と、切実さをもって毎日の仕事や生活をつづけていると感じることが多い。たとえば、双葉駅前のコミュニティセンターや伝承館で働く方々である。そして、語り部として語りつづける人たちの語りを聞くと、感想を伝えることも、質問することもできないことは多いが、ひとりひとりの人がおそらく、普段の生活のなかでもどこかで考えつづけている問題があるのだろうと感じる。

双葉町に通う〈わたし〉が言葉にできるフィールドワークの経験は、このように未知の事柄が既知になるような「発見」のないところを超えるものではないかもしれない。ただし、鈴木の指摘は、こうした調査をとおした曖昧な感情経験に輪郭を与えるてがかりになるだろう。前節では、伊助さんの「今だったら毎日旗ふってでも反対します」という言葉を引用した。この言葉が印象深く残っているのはなぜだろうか。

いうまでもなく、〈わたし〉が伊助さんに出会ったのは震災という出来事が生じた後である。震災という出来事がなければ伊助さんと出会うこともなかっただろう。語り部を聞かせていただき、個人的にも時間をとっていただき、お話を聞かせていただくなかで、2011年3月11日以前の双葉町はどのような町で、伊助さんはどのような日常を過ごしていたのかを知りたいと思うことがある。学術的な関心というよりは、個人的な関心かもしれない。

いま、目の前にいる伊助さんは、震災を体験した後の伊助さんであり、もし時間を巻き戻すことができるなら、震災が生じる以前の双葉町はどのような町であり、伊助さんのお父さんはどのような人生を過ごし、そこにはどのような時間が流れていたのか。これらをリアルに知ることができれば、伊助さんというひとりの人が、いま考えていることの意味をもう少し正確に知ることができるのではないかと思うからだ。しかし、映像のように時間を巻き戻すことはできない。鈴木が正しく指摘するように、私たちは不可逆的な時間を生きている。

7　今になったから、言えること

伊助さんの語り部をはじめて聞いてから、折に触れて思い出す語りがある。伊助さんは、双葉南小学校で地震の揺れを感じ、一緒に仕事している人たちにも家に戻るように指示をだし、自分自身もすぐに家に戻った。家にいる「おふくろ」が心配だった。

> すぐ家に戻ってきました。そんでですね。まず、やはり、おふくろが心配ですから「おふくろ大丈夫かあ」て声かけたらですね。いや「大丈夫だあ」って。ああ、そうか、よかったな。それとですね。やはり。変な安堵感あったっていうかですね、やはり、あれだけの揺れで、建物はほとんど傷んでおりませんでした。ただ、ブロック塀、門柱、そういうものは倒れてました。ほとんど、まあ、わかんないくらいに、がちゃがちゃに倒壊してました。それで、そのなかでですね。片付け。おふくろは、すぐです。性格的に。片付け、やるという感じでいました。でも、1、2時間で終わるような状況でないもんですから。「いや、おふくろ、今日はもう余計なことすんなよ」ということは、まわりみたときにですね。いちばん地区に戻るのは、私が早いような状況でした。それで、じゃあ、おふくろ、いまっから、俺も、一軒ずつ声をかけて、まわってくっから。おふくろ、ここ絶対動かないでいろよな。

この後、伊助さんは地区の人たちに避難を呼びかける。当時は50戸ほどの集落であった。伊助さんがお母さんに「ここ絶対動かないでいろよな」と伝えたのは、そこは「誰が、どっから見ても見える場所」であり「避難場所に行くためには、その道路を確実に通る」ためである。

> 1軒ずつ、西の方から声をかけていきました。そしたら、いたか、おおと、声もしない。応答もありません。そういうとこもありました。ただ、でも、もういっかい、くどくなるくらい、いたのかあ、おう、やはり、私より、ひとまわり上、ちょっと上、世代です。そうすると、なかなか、すぐ反応というか、それと、やはり、片付け、してたみたいで。いや、こういうわけで、これだけ揺れたんだから、片付けなんか、今日、1時間、2時間でおわんねえんだから、俺の、おふくろの、道路に腰おろさせてきたから、自分の車で今日はとりあえず避難所いくべ。

震災の当時、伊助さんは55歳だった。伊助さんより「ひとまわり上の世代」の人たちのなかには避難所に行こうという伊助さんの呼びかけに応じてくれない人もいた。2時46分に地震が生じ、自宅に戻ったのは2時55分くらいであった。その後、3時10分に防災無線がなるまでに地区のすべての家に声をかけることはできず、声をかけることができたのは50戸の3分の1ほどだった。

> 声をかけても、やはり、私らよりもですね、その当時、私はちょうど55でした。ひとまわり上、以上になりますと、わかったんで、素直に、いうこと聞いてくれる先輩方、おりませんでした。ほんなの、こ

ねえわ、大丈夫だわ、みたいな話でした。ただ、でも、今日は、避難所いくべ。もう、なかなか言うこと聞いてくれませんでした。

伊助さんは、こうした震災が生じた直後の地区の状況を語るときに「いまだから、こうやって、みんなの前で、言えることもいっぱいあります」と説明する。おそらくは、語り部になってからはじめて言葉にすることも多くあるだろう。伊助さんは、14人の地区の人たちを軽トラックに乗せて、浜野地区から1キロほど離れた双葉厚生病院の東側にある避難所に向かった。軽トラックに乗せていた人たちを降ろしているあいだに、地区のある人から声をかけられた。

いや、伊助さん、うちのばあちゃんと、子供きてねえんだ。

伊助さんのはじめて聞いたときから、忘れることのできない語りがある。それは、伊助さんが地区の人たちを避難所まで軽トラックに乗せて移動した後に、もういちど地区に残っている人のもとに向かった「時」を思い出す語りである。伊助さんの語りは、その後、17回ほど聞いているが、この語りは、伊助さんというひとりの人が、震災の後に「語り部」として語るだけではなく、浜野地区の行政区長として地区の人たちのために、そして自分自身のためにも、津波で流された神社の再建をはじめとする煩雑かつ労力のかかる仕事に妥協なく取り組む原点になる体験であるように思えてならない。

ただ、でも、じゃあ、みんなすぐ降りてくれ。お願いして。なんでかつうと、その、母ちゃんは、役場職員でした。そんで、避難した人の世話の係をしてました。本来は、自分も行きたくて、みんなが来る前に、来たかったって、後からの話ですけど。ところが、職務上は、やはり、私も家族、家内とも、しゃべれば、やはり、それは職務上は帰れねえけど、ただ、俺は普通に、まあ、一般人ですから、いや、そのくらいしてやればよかったべなとか、喋ってるんですけど。そんで、わずか50メーターのとこ。そこは、中学校でたばっかの女の子、70半ばのばあちゃんが亡くなりました。私も、本来は先に行けばよかったなと。今になればね。つくづく思います。

伊助さんが中心となりかつて震災まで地区に暮らした人たちと連絡をとりあい、協力しあいながら再建に取り組んでいる浜野地区の中野八幡神社の前の通りには2軒の建物が当時の状況のままに残されている。伝承館の周囲は「福島県復興祈念公園」として整備されるが、伊助さんは地区の人たちとの話し合いを重ね、中野八幡神社は地区の所有地として伊助さんが中心になり建て直している。また、神社の敷地には、かつて地区に暮らした人たちや、新たに双葉を訪れる人たちが憩える場所として活用したいという意向により東屋も建てる形で整備されている。神社に置かれた石碑には、伊助さんの奥様が考案した「復活を願い」と題された文章が彫られている。

8 復活を願い

ここ浜野地区は阿武隈の山並みを背に、太平洋に向かって広がる清々しい田園地帯であった。風光明媚で四季の色調変化の見事さは、自然と人とのつながりが成せた技といえる。

2011年3月11日、東日本大震災(地震・津波・原発の多重災害)に見舞われた。十四名の大切な命を亡くし、今だ全戸避難に至っている。このようなことが二度と起きないことを祈るばかりである。災害時の注意喚起や勧告には素直に耳を傾け、命最優先の行動をとってほしい。

何れまた、この地に人々が根を下ろすだろう。自然とともに生き生きと息づく姿を思い描き、復活を願う記念碑をここに建立する。

令和五年五月吉日[5)]

震災以前の双葉町の文化や歴史を知ることは、震災の経験の語りを聞く際には重要な役割を果たすはずだ。ここに引用した中野八幡神社の石碑に彫られた文章は、そのことを伝えている。神社の再建の仕事を進めているという話を伊助さんから聞き、この場所を訪れたときのエピソードである。双葉駅から自転車を借りて伝承館からも見える神社のある繁みに向かって歩いていたとき、繁みのなかから孔雀が姿をあらわした。

あまりの唐突さに意表をつかれ、とても不思議な気持ちになった。目の前を歩いている孔雀は、何事もなかったかのようにどこかへ去っていった。いま、目の前で生じていることにたいして感じることを適切に表現する言葉が見当たらない。そのような感覚に陥った。ごく自然なこととして、目の前に生じている出来事であるように感じられた。

この直後に神社で待ち合わせた伊助さんからも孔雀の話を聞いたように思うが、この出来事についてはあまりの驚きのためにフィールドノートにも記録をつけておらず、記憶は定かではない。それ自体にどのような意味があるのかわからないが、この場所には人智を超えた何かがあるのではないかと思う。

この神社のすぐ近くに、津波の被害を受けた家が残っている。伊助さんは、神社を建て直し、これからは庭を作りたいと考えている。こうした仕事をするときには、残された家が視界に入る。本稿を閉じるにあたり、伊助さんが地区の人から頼まれて「中学校を卒業したばかりの女の子」と「 70半ばのばあちゃん」のために、もういちど地区に戻る際の気持ちを言葉にしている語りに触れておきたい。

その日は、すぐ、みんな降ろして、ちょうど、その十字路まで戻ってます。伝承館、交差点、入るところの。そこまで戻ってきたときですね。警察に止められました。戻っちゃなんねえって。ただ自分の考えは、そんな、津波くるとは思ってませんし、こねえと思ってました。こないと思ってました。そんな

部分で、まあ、パトカー見えなくなっちまったら、いくっていう頭しかありませんでした。わずか、そこから数百メーターですから。

双葉町を訪れ、当時は十字路ではなく、T字路であった場所を歩くたびに、亡くなられた方々の顔を思い浮かべることはできないが、伊助さんの当時の心境と、その直後に伊助さんが見た風景は鮮明に思い浮かぶようになりつつある。現在は伝承館が建てられているが、この場所には、出来事を語り伝える必要のない日常の風景があったはずだ。その風景には、双葉という場所に固有の時間があった。その時間は、石碑に彫られた言葉が示すように、自然と人とが関係するなかで形作られる時間であったのではないだろうか。

伊助さんは17歳のときに東京にでて、植木の修行を始めるようと考えた理由について、家の庭の植木を手入れするのが好きだったからと話してくれることがある。子供の頃には、浪江町の請戸漁港の近くから双葉の浜野地区まで友達と泳いで帰ってきた思い出を語ることもある。夏は涼しく、冬もさほど寒くはならない。このあたりには「ふりもの」がないと説明してくれる。現在暮らしている福島県の中通りにある須賀川市と比べると、双葉の夏は5度ほど涼しく、冬は5度ほど暖かいそうだ。

神社に併設して建てられた東屋にいると、海からの風を心地よく感じる。双葉を訪れるまで、東北を訪れたことのなかった〈わたし〉は知らないことばかりである。東屋で伊助さんの語りを聞いていると、かつての生活の様子をすこし想像することもできる。復活とはどのような状態になることを意味するのだろうか。復活を願う気持ちは、震災以前の双葉の生活を知る人にしかわからないところがあるだろうが、その意味を考えることは直接的には被災を体験していないものにもできるかもしれない。

内山節は、時計の刻む無機的で均等に過ぎ去りつづける「縦軸の時間」と比較して、自然と強く結びついた暮らしと労働を営む者たちの時間世界を「横軸の時間」と名付けた。内山は武蔵野で過ごした子どもの頃をふりかえり、横軸の時間の具体的な有り様を「ゆらぎ」という言葉を用いて描写している。

子供の頃の私はよく小川の横の道を歩き、走り、立ち止まった。いま思い出してみると、子供たちの時間は川の流れのようにつねにゆらいでいて、けっして等速ですすんではいなかった。長い時間が一瞬のうちに過ぎたかと思うと、わずかなときを過ごすために、あきあきするほど長い時間を費やさなければならなくなる。一瞬の輝きをみせた時間と、長く無稽な時間の織りなす時空がそこにはあった。そして、ゆらぎながら流れゆく川の時間は、自分と等身大の時間を子供たちに感じさせて、その精神を安定させる。（内山 2011: 4）

内山によると、ゆらぎゆく時間は人が生きていく上で必要な時間である。それは、「有限」な時間を生きる「私」という形で自己について考える、私たちの自明性を考え直すてがかりを与える。

その頃の私にとって死とは、自分の主体が無になることでもあり、空白の世界におもむくことでもあった。その空白の世界、つまり何も無い世界のイメージは、どこかでゆらぎの無い世界と結ばれていた。

なぜなら、ゆらぎゆく川の流れのなかから様々な生命が芽生えてくると感じていたように、ゆらぎは生命の世界とともにあり、そのゆらぎが無くなるとき、何もない世界があらわれてくると思われていたのだから。濁流に飲みこまれることは、ゆらぎのない等速の時間のなかに自分が入り、その客観的な時間の世界のなかで自己のいっさいが消え失せることを意味していた。(内山 2011: 5)

濁流に飲みこまれるという言葉を読む〈わたし〉は津波を連想する。時間の哲学は、伊助さんが過ごした双葉の時間と、武蔵野の時間を結びつけてくれるかもしれない。自然と人間のかかわりのなかで生かされるという感覚は、特定の場所に生じる固有なものではないだろう。中野八幡神社の石碑には「何れまた、この地に人々が根を下ろすだろう」と記されている。この言葉が指す未来が実現するためには、震災の記憶とともに、自然とともに生き生きと息づく姿を思い描く双葉に暮らした人々の記憶が重要な役割をはたすはずだ。こうした記憶を語り、記憶の語りを聞く時間はどのように成立しているかという問題を含めて考えていきたい。

注

1） 双葉を訪れて伊助さんと話す際に録音はおこなっていない。インタビュー調査では協力者の許可を得て録音を行うことが多く、筆者も長崎の被爆者調査に取り組んだ際には基本的に録音し、文字起こしに取り組んだ。伊助さんの語り部を聞くときには許可を得て録音する場合もあるが、語り部がおわった後などに個人的に話を聞かせていただく場合に録音はおこなっていない。明確な理由はないが、伊助さんをまえにしたときに、なるべく普段の自分と変わらない自然な状態で話を聞くほうが、伊助さんが考えている問題を、自分自身も素直に考えるのではないかと感じるためかもしれない。その日に聞いた話の内容や、そのときに自分自身が感じたことについては双葉から帰る列車内の時間などを活用してフィールドノートを詳細に書くように心がけている。このような調査の方法にかんする問題についても今後のフィールドワークをとおして考えてみたい。

2） 2022年8月5日の語り部から。丸括弧内は筆者による補足。以下、伊助さんの語り部の引用はすべて8月5日に伝承館でおこなわれた語り部講話の録音にもとづいている。筆者は伝承館を定期的に訪れて、本稿の執筆段階で伊助さんの語り部を17回聞いている。語りの内容は変化している。毎回の語り方にも変化はある。本稿では、何度も繰り返して録音を聞きなおしている2022年8月5日の音声を文字に起こした資料を使用している。語りの変化については長期的な視点で考えていく必要があるだろう。

3） 石田忠は、長崎被爆者の福田須磨子を協力者として質的調査に取り組み、福田の生活史を「漂流」と「抵抗」という枠組みで捉えている。この調査の意義と課題については別の論考で検討している(高山 2022)。

4）『福島民友新聞』2023年6月7日朝刊。

5） 2023年6月26日のフィールドノートから。

参考文献

浜日出夫，2017,「止まった時計」『法學研究』Vol.90，No.1，pp.75-90.

保苅実，2018,『ラディカル・オーラル・ヒストリー　オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店.

Lifton, Robert J. , 1967, Death in Life: Survivor of Hiroshima, New York: Random House.（桝井迪夫監修・湯浅信行・越智道雄・松田誠思訳，2009a,『ヒロシマを生きぬく（上）』岩波現代文庫.）

————, 1967, Death in Life: Survivor of Hiroshima, New York: Random House.（桝井迪夫監修・湯浅信行・越智道雄・松田誠思訳，2009b,『ヒロシマを生きぬく（下）』岩波現代文庫.）

野家啓一，2005,『物語の哲学』岩波書店.

鈴木智之，2020,「出来事の後で日常を生きるということ　柳美里『ある晴れた日に』における時間の形象」『社会志林』67 巻，pp.33-53.

高山真，2016,『〈被爆者〉になる　変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房.

————, 2021a,「無辜の死」『応用社会学研究』No.62，pp.169-74.

————, 2021b,「サバイバーズ・ギルトを再考する　ライフストーリーとメタ・オートエスノグラフィ」浜日出夫（編著）『サバイバーの社会学　喪のある風景を読み解く』ミネルヴァ書房，pp.105-27.

————, 2022,「記憶の社会学と質的研究」『応用社会学研究』No.63，pp.221-30.

————, 2023,「質的調査と時間の哲学　双葉町のフィールドワークから」『応用社会学研究』No.64，pp.231-40.

内山節，2011,『時間についての十二章　哲学における時間の問題』岩波書店.

吉原直樹，2016,『絶望と希望　福島・被災者とコミュニティ』作品社.

————, 2021,『震災復興の地域社会学　大熊町の一〇年』白水社.